

日本語母語話者の談話におけるジェンダー表出

ー自然会話にみる男女の会話スタイルの違いー

鈴木ほたる

東京学芸大学大学院教育学研究科

国語教育専攻日本語教育コース

1. はじめに

日本語は性差のある言葉として知られる言語のひとつである。「女らしい」「男らしい」とされる言葉は、果たして現代の私たちの中にも当てはまることなのか疑問に思ったことがこの研究を始めたきっかけである。変化の多い時代の中で、現代の若者はどのような男女差を会話の中で見せるのだろうか。

表題に挙げた「ジェンダー」とは、生物的性ではなく社会的性を表す言葉である。いわゆる「女らしさ」「男らしさ」といったときにイメージされるもの、例えば「力強い」「理論的」「無口」などは「男らしい」、「弱い」「感情的」「おしゃべり」は「女らしい」特徴として社会的規範をなす。言語と性差は切り離すことのできない関係にある（中村 2006）。Lakoff (1975) のアメリカ英語の女言葉の研究をはじめ、これまで言語とジェンダーの問題について多くの研究がなされてきた。日本語では、主に終助詞や「女性語」のような語彙、敬語表現等ミクロ的な視点からの研究が多かった（小川 2006、水元 2006、Ide 2003）。談話レベルでのマクロ的研究も見られるが、分析対象がマンガやエッセイ、ドラマ等であることが多いのが現状である（因 2006）。

そこで本研究では、大学生の自然会話データをもとに、社会言語学的視点から彼らの話し言葉に現れるジェンダー表出の特徴を考察し、日本語母語話者の言葉の男女差を明らかにすることを目的とする。また、本研究の考察結果を、日本語の会話指導の中でどのように活かせるかを提案したい。

2. 先行研究

2.1 海外での研究

本研究は Coats(1986)の研究に基づいて日本語とジェンダーの関わりを分析するものである。Coats は、ある社会で言語がどのように用いられるかを知っていること「伝達能力」とし、性差によってそれが異なると述べた。これは英語の研究であるため、日本語の男女差について考える際には日本語社会における「伝達能力」の定義をする必要があるだろう。また、この研究で「言語は社会の特徴を反映する」と示されるように、そうであるならばなおさら、その時代や社会に

対応した男女差に関わる言語研究を行っていかねばならないのではないだろうか。この研究での重要な点の一つに、男性と女性の話し方を比較するため、女性同士・男性同士・男女混合グループの実験群を用いたことがある。従来の言語の性差に関わる研究では、男性形式を基準に「女性の特徴」にのみ着目しがちであったが、それでは男性の特徴に対する女性の特徴でしかない。このように男性と女性を同等に比較することで、言語におけるそれぞれの特徴を見出すことができるのではないだろうか。また、この研究の中で見られた英語における男女差の特徴には、「男性は女性より多く罵る」「指示をする際、男性は命令形を女性は依頼形を多用」「男性の方が話す量が多い」「女性は最小の反応を多く用いる」などがある。

Tannen(1990)は、男女間のミスコミュニケーションについて分かりやすく解説し、一般書として広く知られている。Tannenは「男女の言語表現の違いはその社会に属する男女の社会化の結果である」と主張し、社会と言語の結びつきについて言及するものの、社会の中の男女の関係性自体や男女の階層と言語表現の結びつきについての考察がなされていない点に問題があると考えられる。

2. 2 日本での研究

日本語の男女差についての研究に、「性差とディスコース」を分析したメイナード(1997)がある。この研究では、書き手の性別ではなく語りかける相手と言語使用の言語使用について、若者向け雑誌をデータ元に分析が行われた。各誌の言語使用の性差からは従来の男女のイメージと一致するという結果が出されている。男女両方のデータを公平に見るという中立的な視点を保ってデータを分析した点は本研究でのデータ分析の際に見習うべき点でもある。ここで、言語使用と各性のイメージの関係性が見える結果となったが、やはり書かれたものを対象にしているため日本語の現状調査としては不十分であり、話し言葉での分析も必要となってくると考えられる。

一方、鈴木(2007)は日本語教育と日本語の性差について分析した。鈴木は、日本のアニメやドラマが日本語学習者の動機付けになっている点に着目し、日本語母語話者の中に「女性はこのような話すだろう」という共通認識の存在を指摘した。また話し手の、性差に関わる会話スタイルの選択が、談話のストラテジーとして機能するとしている。この研究で注目すべきは、日本語教育と関連させた点である。鈴木は「スタイルの選択により付加された重層的な意味を理解するためには、学習者も母語話者が持つ男女差についての共通認識を質必要があり、日本語の教材においても、女性が女性語を男性が男性語を話すという典型以外の使用についても扱う必要がある。」と述べている。さらなる研究の発展のためには母語話者の共通認識だけでなく、話し言葉を対象とした使用実態の調査も併せて行う必要があるだろう。

3. 研究・分析方法

本研究では、東京在住の大学1年～4年の学生(男性8名・女性8名)を対象に自然会話データを録音し分析する。今回インフォーマントを大学生としたのは、彼らが多感で社会の変化に順応しやすい年代であること、また初対面場面において会社や社会の階層等の社会的距離を極力排

除した会話を行うであろうことが予想されるなどの理由がある。

なお、会話の録音時間は15分で、インフォーマントは、性別・学年（年齢）・学部（専攻）・出身地等を考慮したうえでマッチングし、2人1組のペアを作り、会話をしてもらった。会話データは、「初対面同士の女性ペア」「初対面同士の男性ペア」「友人同士の女性ペア」「友人同士の男性ペア」の全4種類で、それぞれ2組ずつ収集した。データ収集の際の考慮点としては、より自然な会話を収集するため、カフェや学生ラウンジのような大学生活の一部となる場所で録音を行ったこと、またマッチングの際には、初対面ペアの場合に「性別」以外の共通点（専攻や年齢、出身地など）を極力排除したペアになるよう考慮した。

また、収集した音声会話データを文字化の際の表記は、宇佐美(1997)「基本的な文字化の原則 Basic Transcription System for Japanese :BTSJ」に従う。

文字化した自然会話データは、Coats(1986)が取り上げた7つの問題領域—「質問の意味」「話し手の順番連結」「話題転換」「打ち明け話し」「ことばにおける攻撃性」「遮り行為」「聞き役」—を中心に、その他「笑い」や「沈黙」の頻度や「丁寧体・普通体の会話スタイルの切り替え」等について詳しく分析していく。

4. 研究の内容—途中経過（枠内は Coats(1986)の定義）

4. 1 話題転換

- ・男性だけの会話：話題が急に変わる傾向。
- ・女性だけの会話：互いに言ったことの上に立って話を続けるため、話題が発展的に進み、話題転換も徐々に起こる。

●話題数：男性グループ（20・19）、女性グループ（16・17）

—初対面場面では話題数における性差はあまり見られない。

●前の部分に関連しない話題の提示：男性グループ（10/19、9/18）、女性グループ（5/16、4/17）

—男性の方が前の文脈に関連しない話題の登場が多く、「話題が急に変わる傾向」が見られる。

—女性のグループでは、前の文脈に関連させた話題が徐々に進む傾向がみられる。

4. 2 スピーチスタイルの選択

男性 —自己紹介部分（年齢）で年齢を確認した際に、スピーチスタイルが決定。決定後は最後まで変わらない。

—スピーチスタイルの固定化により、ダ体を使用する年長者、デスマス体を使用する年少者という階層性が生まれている。

女性 —学年や年齢が判明した後も、その前と変わらないスピーチスタイルを使用する。

—年齢や学年は会話の上でのスピーチスタイル選択に影響していないことを示す。

4. 3 その他の特徴

男性 —年齢や学年により、階層が生まれると、階層が上の話者が支配的になり、「アドバイス」的発言や話題の提示を多くするようになる傾向がある。

—上の階層の話者の話す分量がかなり多い。

—話し手／聞き手の役割分担が明瞭で、重なり部分が少ない。

—あいづちの回数・沈黙の回数と時間が女性同士（初対面）の会話に比べて少ない。

女性 —学年・年齢の上下関係は会話の支配にあまり影響を及ぼしおらず会話の中での役割は平等に割り振られている。

—話す量（時間）は平等である。

—沈黙が少なく、発話の重なり・笑う回数が多い。

5. 今後の課題

初対面同士の会話データに関して、4で述べた点以外の特徴について分析を続ける。また、友人同士の会話についても同様の分析を行い、「友人同士男性×友人同士女性」の特徴を記述し、それぞれの特徴が出そろった時点で、グループごとに比較する、さらに、「初対面男性×友人同士男性」「初対面女性×友人同士女性」の類似・相違点も記述し、それぞれの傾向・特徴をまとめる。その後、日本語の会話指導用教科書の性差に関する記述を調べ、本研究の考察結果に基づいて日本語教育の会話指導に役に立てる指導内容等を提案したい。

6. 参考文献

- ・ 因 京子(2006)「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」『日本語とジェンダー』日本語ジェンダー学会、ひつじ書房 pp. 53-72
- ・ 宇佐美まゆみ(1997)『日本人の談話行動のascript・ストラテジー研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究（C）研究成果報告書
- ・ 小川小百合(2006)「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用に向けて—」『日本語とジェンダー』 日本語ジェンダー学会 ひつじ書房(2006) pp39-51
- ・ 泉子・K・メイナード(1997)「クリティカル・ディスコース分析 若者向け雑誌における語りかけと性差」『談話分析の可能性』くろしお出版
- ・ 鈴木 睦(2007)「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134号 pp. 48-57
- ・ 中村桃子(2002)「言語とジェンダーの研究の理論」『言語』2月号 第31巻 第2号 大修館書店 pp. 24-31
- ・ 水元光美(2006)「テレビドラマと実社会における女性文末詞のずれにみるジェンダーフィルタ」『日本語とジェンダー』 日本語ジェンダー学会 ひつじ書房(2006) pp. 73-94
- ・ Coats, Jennifer (1986) *Women, Men, and Language: A Sociolinguistics Account of Sex Differences in Language*. Longman.
- ・ Ide, Sachiko (2003) “Women's language as a group identity marker in Japanese “ *Gender Across Languages The linguistic representation of women and man VOLUME3*. Edited by Marlis Helinger, Hadumod Bubmann and John Benjamins. Publishing Company pp.227-238
- ・ Lakoff, Robin(1975) “Language and Woman's Place” *Language and Woman's Place Text and Commentaries.(2004)* Edited by Mary Bucholtz, Oxford University Press. pp.39-76
- ・ Tannen, Deborah (1990) *You just don't understand*. Harper.